



「なにくそ」のところで、
女性の道を切り開いてきた。

明るいパワーにあふれ、まもなく卒寿とはとうい見えぬ。その長谷川道子さんがこの地に嫁いできたのは十九歳のときだった。ちょうど時期を同じくして、野花(のぎょう)の果樹園でめざましい新種が発見された。大玉の、豊かな梅。野花豊後と名づけられた。完熟すれば鶏卵ほどにもなり、果肉もしっかり分厚い。登場してきたときからすでに特産品の貫録を示していたその梅との付き合いは人の女性史そのものでもある。

昭和三十五年に自動車免許を取得した。合格者のなかで女性はたった一人だった。平成三年、農業委員に任ぜられた。中国五県で女性として第二号だった。ともすれば男性中心になりがちな社会にあつて、女性の活躍の道を敢然と切り開いてきたのだ。

「農業とは、工夫をして作物の力を引き出すことよ」

孫たちに、いつもそう諭す。人さまができることは、自分も努力すればできる。つまり「なにくそ、のところが大事よね」。そうやって努力を惜しまないが、うまくいかなかったとしても、決してくよくよしない。「なるしかならん」からだ。なるほど、これぞまさしく若さの秘訣にちがいない。

加工の技術によって、数えきれないほどの表彰を受けてきた。

「あの人の漬けた梅干しは天下一品」と、だれもが激賞するのだが、ご本人は、野花梅のピンクの花のように愛らしく微笑むばかり。

野花豊後の梅干し名人
長谷川道子



ゆ
う
ゆ
う、
ゆ
り
は
り
ま